

靴の話

松井淑子

しばらく前、かかりつけの内科医院で診療してもらい、薬の処方箋をもらって帰ろうとしたら、玄関先に私の靴が見当たらない。その日、私は午前中最後の患者だったから、残っているのは私の靴だけのはずである。

私の靴は紐ひもつきの黒いスニーカーで、脱ぎ履きが楽なように紐のそばにファスナーがついており、これが気に入って愛用しているものだ。ところが残っているのは、やはり紐つきの黒いスニーカーだがファスナーがついておらず、それに私のものよりやや大きい。

困って看護師さんに相談すると、看護師さんは驚いて、私の前に帰っていった三人の女の患者さんの誰かが間違ったのだろうか、電話して調べてみましょう、と言ってくれた。

窓口の向こうで、あっちこっちに電話をかける声が聞こえてくる。だが、相手はまだ家に帰り着いていなかったり、連絡がついても、「靴はまちがっていない」と言われたりで、結局分からずじまいのようである。

先生まで出てこられて心配してください。先生は若い女医さんで、ご自分の靴を出してきて、「私は夕方、診察が終わるまでは履かないから、もし足に合うならこの靴を履いて帰って、お宅でご自分の靴に履きかえて、私の靴は夕方までに返してくれる、というのではどうでしょう」と言われる。

結局、その靴を借りて帰ることにした。かかとの低い黒のパンプス型の靴で、若い人のものらしく可愛らしいピンクの飾りがついている。多少、気恥ずかしい思いをしながらもその靴を借り、まず薬局にいったって薬をもらい、ついでにスーパーマーケットに寄ってあれこれ面白い物をする。

家に帰り着いたら電話のベルが鳴った。急いで受話器を取ると、内科医院の看護師さんからである。

「あのねえ、靴を間違えて履いていた方が返しにみえましたよ」

と言う。周りでケラケラと笑う声が聞こえてくる。「それがねえ」と、看護師さんも笑い声で続ける。「男の人なんですよ」

私はあきれてしまった。私はからだの割に足が小さい、とよく言われる。その小さな足用の靴が履ける男性とはいったいどんな人だろう。ともかく先生から借りた靴を返しかたがた、自分の靴

を受け取りに再び内科医院に向かった。返しにきた男性はいなかった。

つい先日のことである。またその内科医院にいくと、玄関で若い男性とすれ違った。ジーパンにジャンパーというラフな恰好かっこうの若い男性である。ずいぶん小柄な人だな、と思いながら窓口に行く

と、看護師さんが、「あの人ですよ。靴を間違えたのは」

と、小さな声でそつと教えてくれた。

「清紫会」だより

◆第188回 二〇二〇年二月二十日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室

（提出作品）林博子・泡セツケン／松井淑子・靴の話

◆第189回と第190回の集会は新型コロナウイルスの影響で中止。